

2026年 AI事業者ガイドライン改定案のポイント：AIエージェントとフィジカルAIへの対応

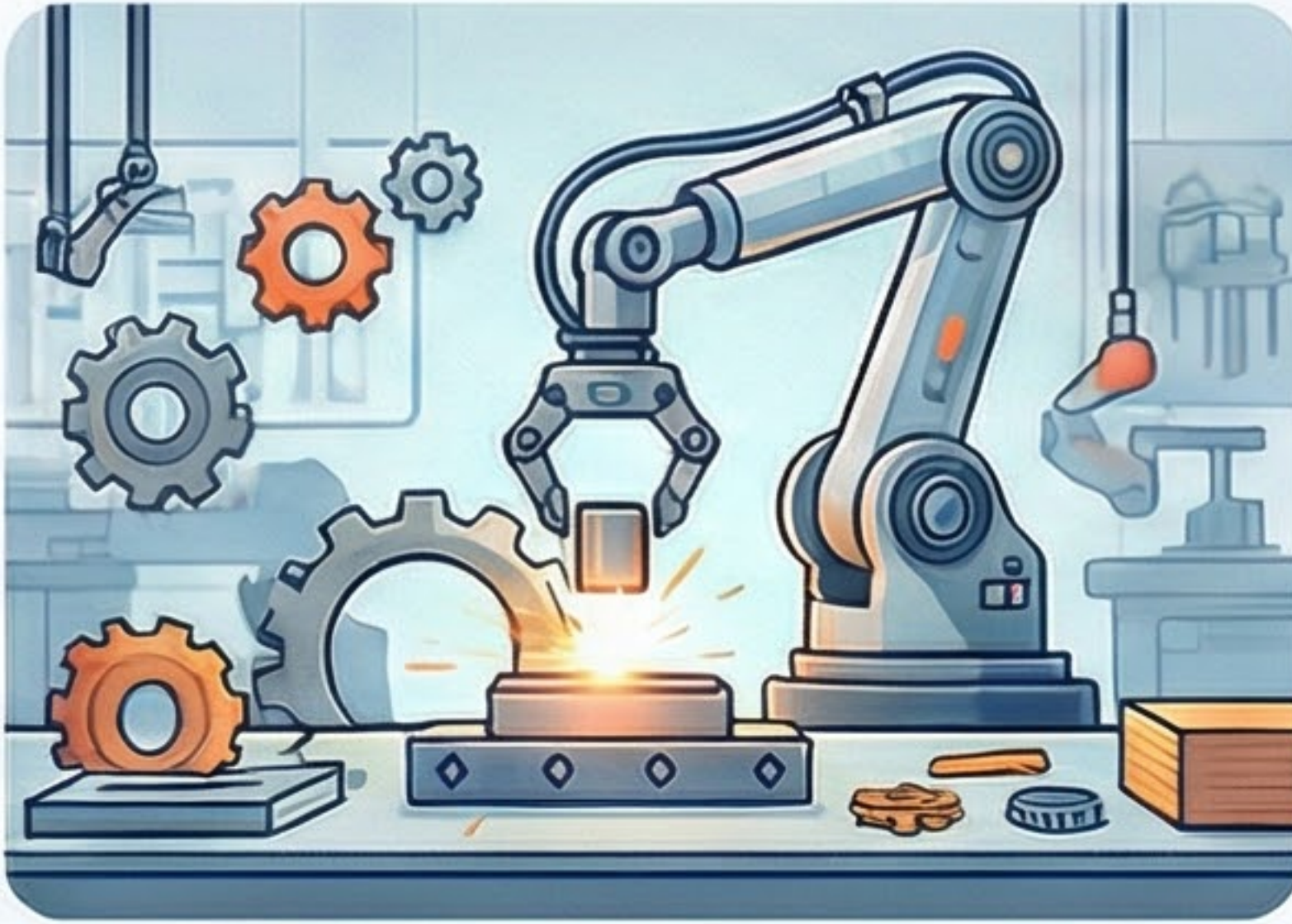
日本政府は、自律的に動く「AIエージェント」と現実世界に作用する「フィジカルAI」の普及を受け、ガイドラインを改定しました。
最大の新规定は「人間の判断を必須とする仕組み」の導入であり、安全性の確保とイノベーションの促進の間に大きな議論を呼んでいます。

新たに追加された2つのAI定義



AIエージェント

特定の目標に向け、環境を感知して自律的に行動するサイバー空間上のシステム。



フィジカルAI

センサーで物理環境を捉え、アクチュエータを通じて現実世界に直接作用するシステム。

項目	AIエージェント	フィジカルAI
作用対象	サイバー空間（データ・タスク）	物理世界（移動・操作・加工）
主なリスク	プライバシー侵害、誤動作	物理的損傷、機構の複雑化
期待される便益	業務効率化、労働力補完	介護支援、製造現場の安全性向上

「人間の判断」をめぐる議論と課題



安全性の確保

人間の判断を必須化する仕組み：AIの風定や予断せぬ損害を防ぐ「安全装置」として、人間が介在する設計が求められる。



安全性 vs イノベーションの対立：安全性を重視する慎重派と、リアルタイム性や国際競争力の低下を懸念する推進派で意見が二分。



リアルタイム性と競争力

国際的な規制との整合性



EU AI法のリスクベースアプローチの影響を受けつつ、日本独自のバランスを模索中。

